

木葉天目に残す土地の記憶

Konoha Tenmoku : Memory of the Land

井上 七海

指導教員 西野 隆司

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 値値創造研究室

キーワード：陶芸、天目、器、釉薬

1. 研究の動機と目的

東洋陶磁美術館で重要文化財の木葉天目を見かけ、その技法や自然由来の釉薬に興味を持った。プラスチックゴミ問題が年々深刻化している中、自然由来の素材を用いた食器の魅力を改めて世に広め、現代においても馴染みのあるものにすることを目的とする。

2. 研究意義

失われつつある技法の再現による文化の継承。また、各地の自然を器に残すことによる街の歴史づくりと地域経済の活性化への貢献。

3. 調査内容

初めに、木葉天目の発祥と歴史について調べた。そもそも「天目」とは日本で使われる言葉で、鎌倉時代、中国に留学していた僧侶が天目山の禪院から持ち帰った茶碗に由来すると言われている。天目山で使用されていた茶器の黒釉（黒天目釉）の色と器形を天目と呼んだ。

木葉天目と天目茶碗の発祥は少し異なり、天目茶碗は中国福建省の建窯を中心に作られていたのに対し、木葉天目は江西省の吉州窯で作られていた。しかし、宋王朝の滅亡とともに木葉天目の技術も滅亡し、現代まで「幻の技術」とされていた。

次に、植物等を用いた焼き物について調べた。岡山県備前市周辺を産地とする焼き物に、「備前焼」がある。その中の一つである「緋擣（ひだすき）」は、素地に藁を巻いて焼く技法で、薄茶色に焼け

る素地に対して、藁が当たった箇所のみ緋色に変化する。

また、「自然灰釉」と呼ばれる野菜や花を用いた釉薬も存在している。処分されてしまうはずの野菜の活用など、社会問題の解決に貢献できる可能性は十分に考えられる。

最後に、実際に近隣で集めた葉を用いて実際に木葉天目の試作を行った。



1)



2)

写真1：煮沸前の桑、紫蘇の葉

写真2：600℃で再焼成後の葉

（釉薬は吉州窯風黒天目を使用）

煮沸前の桑の葉と紫蘇の葉を、本焼きされた平

皿に乗せ、600°Cで再焼成した。

片方（写真2左）にだけアルミホイルを被せて焼いたところ、何も被せず焼いたもの（写真2右）に比べ葉の姿がはっきりと残った。

4. デザイン展開

初めは簡単な平皿に木の葉を焼き付けて試作を行った。

- ・煮沸する前の葉 / 煮沸後の葉
- ・アルミホイルを被せて焼く / 何も被せず焼く

以上のように比較しながら10種類の葉（桑、紫蘇、イチョウなど）を使用し、小鉢や平皿を中心に制作を進めた。

5. 今後の展開

様々なサイズや形の器を制作し、近隣の飲食店での使用やお土産としての販売を検討している。

陶芸教室での制作体験やふるさと納税の返礼品としての展開、その土地の葉を使用することで小学生の地域探検のきっかけとなることも期待できる。

6. 参考文献

- ・芳村俊一『釉から見たやきもの』光芸出版, 1996
- ・原田隆峰『木葉天目の謎』書肆侃侃房, 2011
- ・北川八郎『自然灰釉の作り方』理工学者, 2010
- ・保田勝久『木の葉天目とは?』作陶の世界

2003年2月15日更新

（最終閲覧日：2020年10月19日）

<http://www.squest.co.jp/satomi/index.html>